名古屋芸術大学研究紀要第36巻　271～279頁（2015）

遊び指導に対する保育者の意識と「鬼ごっこ」の実施状況

Consciousness of Nursery Teachers to Instructing Play and Practice Circumstances of "Tag"

渡邊　明宏　*Akihiro WATANABE*
（人間発達学部）
野中　壽子　*Hisako NONAKA*
（名古屋市立大学大学院）

1. はじめに

幼児の日常生活における身体活動の減少と、それによる心身の成長・発達への影響が危惧されるようになって久しい。幼児のあらゆる活動の基盤は遊びであり、活発に遊ぶことをとおして心身の成長・発達が促される。現状において、幼児が伸び伸びと遊べる身近な環境としては、日中の多くの時間を過ごし、安全に遊ぶ空間が確保され、そして遊ぶ仲間がいる保育施設が至適である。そのため、日々の保育では活発な身体活動を伴う遊びが保育教材として積極的に採用され、指導されることが強く望まれる。

幼児にとって親しみやすい伝承的な遊びに「鬼ごっこ」がある。これは、ルールに基づく「逃げる－追う」関係を基盤とする遊びであり、その種類や遊び方は実に多い。身体活動として、走動作を中心にスピーディかつダイナミックな身体活動が展開される遊びである。また、運動強度は高いものから低いものまで、心肺機能への負荷がその種類によって一様ではないことも大きな特徴である[1)]。また、ピアジェの認知発達理論に基づいて教育に役立つ集団遊びの条件を示したKamiiとDeVries（1980）は、鬼ごっこが特に社会性の発達に好ましい遊びであると評価する[2)]。さらに、鬼ごっこは保育教材として、遊びの展開における塑性が高く、保育者が幼児の状況や時期、園の環境に応じてふさわしい種目を選択したり、遊びに多様な工夫を加えたりすることが可能であり、鬼ごっこは保育において意義の大きい遊びであると言える。

ただし、遊びとは本来自由で自発的な活動であり、それを「指導する」ということには相対する概念が併存しているとも言える。これに関する保育者の意識として、1989年の幼稚園教育要領の改訂以降、積極的に遊びを指導することをためらう風潮が指摘されている[3) 4)]。そして、それがいわゆる「自由遊び」の時間ともなれば、いっそう保育者からの働きかけを控えようとしたり、見守ることに徹しようとしたりする傾向が予想される。しかし、先に述べたとおり遊びは幼児期のあらゆる活動の基盤であるため、設定活動との対比によって自由遊びだからと保育者からの働きかけをしないということは、より深い矛盾を含むと考えられる。特に鬼ごっこのような伝承的な遊びは、かつて子ども集団において年少者が年長者によって、時に「みそっかす」扱いされながらも、教えられることによって

伝承されてきた[5]。そのため、保育において鬼ごっこを教材として採用し活用するためには、まず保育者による指導が必要であると考えられる。

2. 保育における鬼ごっこ実施の実態

筆者らはA市内の幼稚園・保育所を対象として、鬼ごっこの実施状況について調査を実施した[6)7)]。これによると、全体の半数以上の園において実施されていたのは、氷鬼・追いかけ鬼・ドロケイ・色鬼・しっぽ取りの5種目だけであった。また、設定活動か自由遊びかという実施の形態に関して、設定活動として実施されることのほうが多かったのは、しっぽ取り・ねことねずみ・ひっこし鬼・子とろ子とろ・手つなぎ鬼・缶けりの6種目だけであり、鬼ごっこの実施は自由遊び時間に多い傾向がうかがえた。さらに、実施頻度に関しては、半数以上の園で週に1回以上実施されていたのは追いかけ鬼・氷鬼・ドロケイの3種目だけであった。この3種目は、全体の実施率の上位3種目と同じである。

これらの結果から、保育における鬼ごっこは限定された数種目だけが広く実施され、さらにその実施の多くは自由遊び時間に委ねられている傾向が判明した。保育者によって指導される機会が乏しい実態、そのために幼児が未経験の新しい鬼ごっこを獲得する機会を逸している状況が懸念された。

3. 研究目的

以上のように、鬼ごっこは保育教材として価値が高い遊びであるが、その保育における実施は種目が限定的であり、また保育者によって指導される機会が乏しい傾向であった。幼児の健やかな心身の成長・発達のために、鬼ごっこが保育教材としていっそう選択され、活用されることが望まれる。

日々の保育は、指導計画等に設定した「ねらい」を達成するために、ふさわしい保育内容を保育者が選択して展開される営みである。その際、保育内容の選択、具体的には保育教材の選択や指導・援助の方法は、それぞれの保育者の意識や保育観によるところが大きい。特に鬼ごっこは、スピーディでダイナミックな身体活動を伴い、概して屋外の園庭など広いスペースにおいて展開される運動遊びである。そのため、保育教材としての選択や実施に際して、他の静的な遊びよりも保育者の意識や考え方に影響を受けやすい傾向にあると考えられる。このような保育者の意識は、鬼ごっこの実施、指導の前提となる条件とも言えるが、これについて検討された研究は見当たらない。

そこで本研究では、保育において鬼ごっこ指導が積極的に実施されていない現状を踏まえ、これが保育者の遊び指導に対する意識に影響を受けているのではないかという仮説を設定する。そして、保育者の意識として前述の実施状況の調査時に併せて回答を求めた「運動遊びを指導する際の保育者の留意事項」に着目し、その傾向と保育における鬼ごっこの実施状況との関係性について検討する。このことによって、前提条件である保育者の運動

遊びに対する意識と鬼ごっこの実施状況について傾向を明らかにし、日々の保育において積極的に実施、指導されるための方策を検討するための手がかりを得ることを目的とする。

4. 方　法

1）対　象

A 市内の公・私立の幼稚園及び認可保育所の合計 466 園を対象として、郵送による質問紙調査を実施した。各園の年長（5 歳児）クラス担当の保育者 1 名に、鬼ごっこの実施状況及びそれに関連する事項について回答を依頼した。質問紙の回収率は 50.2% であった。

2）時　期

質問紙は 2008 年 11 月初旬に郵送した。公立保育所については、同じ時期に管轄する市役所を通して配布した。回答の期限は同年 12 月中旬までとして依頼し、同封した返信用封筒によって回収した。

3）データ及び分析方法

本研究において分析の対象としたデータは、運動遊びの実施・指導に際して留意している事柄の自由記述による回答内容と、鬼ごっこの実施状況である。自由記述の内容は複数のカテゴリに分類し、各カテゴリに該当する留意の有無と鬼ごっこの実施種目数とを比較した。鬼ごっこの実施状況は、一般的なルールを併記して羅列した鬼ごっこの各種目について過去 1 年間における実施の有無を尋ね、次に実施があった各種目について実施形態（自由遊び・設定活動・両方）と実施頻度（ほぼ毎日・週に 1 回以上・月に 1 回以上・月に 1 回未満）を尋ねたものである。

なお、データの統計解析には「HALBAU 7」（シミック株式会社）を使用し、各解析手法における統計的有意水準は 5%（$p<0.05$）とした。

4）倫理的配慮

本研究における調査は、名古屋市立大学大学院人間文化研究科 研究倫理委員会の承認を受け、その規定に従って実施した。

5. 結　果

1）留意事項のカテゴリ設定

まず、本調査で得られた運動遊びの実施・指導に際しての自由記述による留意事項の内容について、鬼ごっこの実施状況との関連性を分析するためにカテゴリ化を行った。これにあたり、山田（1999）及び勅使（1999）によってあげられた遊び指導における保育者の留意すべき事項[8) 9)] を参照し、保育者が何を対象として留意するかという一定水準に基づ

いて、回答内容と適合した項目をカテゴリとして設定した。その結果、「教材選択・環境整備」「安全への配慮・養護的事項」「指導・援助上の工夫」「楽しさ・意欲への配慮」「集団に対する働きかけ」「個々に対する働きかけ」の6カテゴリが設定された。また、本調査が運動遊びについて行われたことから、「身体活動に対する配慮」の1カテゴリを独自に追加し、合計7カテゴリとした。

これらの留意カテゴリと分類された主要な回答内容について、表1に示した。過半数の回答が該当したのは、「安全への配慮・養護的事項」（77.1%）だけであった。これに次いで「指導・援助上の工夫」（44.1%）、「教材選択・環境整備」（24.2%）、「楽しさ・意欲への配慮」（16.3%）、「集団に対する働きかけ」（15.0%）、「身体活動に対する配慮」（14.1%）、「個々に対する働きかけ」（8.4%）であった。なお、1回答に含まれた該当カテゴリ数は1.99±0.99であった。

安全への配慮や養護的な事柄については、運動遊びの指導に際して多くの保育者に留意されていた。しかし、このカテゴリのみ該当する回答が19.4%（N=44）あった。また、カテゴリに1つも該当しなかった回答も5.7%（N=13）あった。

表1　留意カテゴリと主要な回答内容及び該当数（N=227）

留意カテゴリと主要な回答内容	該当数	%
安全への配慮・養護的事項 ケガをしないように／運動靴をきちんとはく／水分補給させる	175	77.1
指導・援助上の工夫 ルールを理解できるよう／わかりやすく説明する／教師から誘う	100	44.1
教材選択・環境整備 発達に合っているか／自分たちだけで進めていける内容／スペースを確保	55	24.2
楽しさ・意欲への配慮 楽しいと思えること／楽しい雰囲気づくり／意欲的に取り組めるよう	37	16.3
集団に対する働きかけ みんなで一緒に遊べるよう／伝え合いの援助をする／仲間意識を高める	34	15.0
身体活動としての配慮 思い切り体を動かせるよう／外遊びを多く経験する／運動のポイントを指導	32	14.1
個々に対する働きかけ 個々にあった援助を工夫する／苦手な子を誘う／その子に合った遊び方	19	8.4

2）実施形態との関係性

各留意カテゴリへの該当の有無と、実施形態（自由遊び・設定活動）別の鬼ごっこの実施種目数について表2に示した。「安全への配慮・養護的事項」「指導・援助上の工夫」「教材選択・環境整備」「集団に対する働きかけ」では、該当の有無による鬼ごっこの実施種目数に有意な差は認められなかった。

自由遊びでは、「身体活動としての配慮」「個々に対する働きかけ」の該当群の実施種目数が非該当群よりも有意に多かった（$p<0.05$）。特に「身体活動としての配慮」の該当群は、設定活動と合わせた種目数でも非該当群よりも実施種目数が有意に多かった（$p<0.01$）。一

方で、設定活動においては、「楽しさ・意欲への配慮」の非該当群の実施種目数が該当群の種目数よりも有意に多かった（$p<0.05$）。

表2　留意カテゴリへの該当と実施形態別の種目数

		自由遊び		保育活動		合　計	
		種目数	有意差	種目数	有意差	種目数	有意差
安全への配慮・養護的事項	該　当	5.61	n.s.	3.01	n.s.	6.77	n.s.
	非該当	5.04		2.29		6.15	
指導・援助上の工夫	該　当	5.74	n.s.	3.02	n.s.	6.84	n.s.
	非該当	5.27		2.70		6.46	
教材選択・環境整備	該　当	5.95	n.s.	2.98	n.s.	6.93	n.s.
	非該当	5.33		2.80		6.53	
楽しさ・意欲への配慮	該　当	5.54	n.s.	2.19	*	6.46	n.s.
	非該当	5.46		2.97		6.66	
集団に対する働きかけ	該　当	5.50	n.s.	2.88	n.s.	6.65	n.s.
	非該当	5.47		2.83		6.62	
身体活動としての配慮	該　当	6.31	*	3.16	n.s.	7.72	**
	非該当	5.34		2.79		6.45	
個々に対する働きかけ	該　当	6.53	*	2.53	n.s.	7.05	n.s.
	非該当	5.38		2.87		6.59	

n.s.: 非有意，*: $p<0.05$，**: $p<0.01$

3）留意カテゴリと実施頻度

各留意カテゴリへの該当の有無と、鬼ごっこの実施頻度について表3に示した。ここでは、日常的に実施されていると判断される週に1回以上の頻度で何らかの鬼ごっこを実施していた回答を抽出し、各留意カテゴリへの該当の有無の割合を示した。なお、本項で日常的と設定した条件には90.8%（N=206）の回答が該当した。

「指導・援助上の工夫」の該当群において、日常的な鬼ごっこの実施の割合が非該当群よりも有意に高かった（$p<0.05$）。しかし、これ以外の留意カテゴリにおいて該当の有無による実施種目数に有意な差は認められなかった。

表3　留意カテゴリへの該当と実施率

		週に1回以上実施	
		%	χ^2
安全への配慮・養護的事項	該　当	90.3	n.s.
	非該当	92.3	
指導・援助上の工夫	該　当	95.0	*
	非該当	87.4	
教材選択・環境整備	該　当	96.4	n.s.
	非該当	89.0	
楽しさ・意欲への配慮	該　当	91.9	n.s.
	非該当	90.5	
集団に対する働きかけ	該　当	88.2	n.s.
	非該当	91.2	
身体活動としての配慮	該　当	93.8	n.s.
	非該当	90.3	
個々に対する働きかけ	該　当	94.7	n.s.
	非該当	90.4	

n.s.: 非有意，*: $p<0.05$

4）留意カテゴリと実施種目

各留意カテゴリへの該当の有無と、種目別の鬼ごっこの実施率について表4に示した。ここでは、回答全体における実施率が50%以上であり、保育者に広く周知されていると思われる氷鬼・追いかけ鬼・ドロケイ・色鬼・しっぽ取りの5種目について分析を行った。

「楽しさ・意欲への配慮」「集団に対する働きかけ」「個々に対する働きかけ」においては、カテゴリへの該当の有無による各種鬼ごっこの実施率に有意な差は認められなかった。「安全への配慮・養護的事項」では、追いかけ鬼・色鬼の該当群の実施率が有意に高く（$p<0.05$）、「指導上の工夫」ではドロケイ（$p<0.01$）、「教材選択・環境整備」では色鬼（$p<0.05$）、「身体活動としての配慮」ではドロケイ（$p<0.05$）の実施率が非該当群よりも有意に高い結果であった。

表4　留意の有無による各種鬼ごっこの実施率

		氷鬼		追いかけ鬼		ドロケイ		色鬼		しっぽ取り	
		%	χ^2	%	χ^2	%	χ^2	%	χ^2	%	χ^2
安全への配慮・養護的事項	該当	93.7	n.s.	93.7	*	84.0	n.s.	84.0	*	66.9	n.s.
	非該当	92.3		84.6		96.5		71.2		63.5	
指導・援助上の工夫	該当	96.0	n.s.	94.0	n.s.	93.0	**	82.0	n.s.	64.0	n.s.
	非該当	91.3		89.8		78.0		80.3		67.7	
教材選択・環境整備	該当	96.4	n.s.	96.4	n.s.	90.9	n.s.	90.9	*	70.9	n.s.
	非該当	92.4		90.1		82.6		77.9		64.5	
楽しさ・意欲への配慮	該当	94.6	n.s.	91.9	n.s.	91.9	n.s.	70.3	n.s.	54.1	n.s.
	非該当	93.2		91.6		83.2		83.2		68.4	
集団に対する働きかけ	該当	97.1	n.s.	91.2	n.s.	94.1	n.s.	79.4	n.s.	61.8	n.s.
	非該当	92.7		91.7		82.9		81.3		66.8	
身体活動としての配慮	該当	100.0	n.s.	100.0	n.s.	96.9	*	78.1	n.s.	75.0	n.s.
	非該当	92.3		90.3		82.6		81.5		64.6	
個々に対する働きかけ	該当	100.0	n.s.	100.0	n.s.	94.7	n.s.	89.5	n.s.	57.9	n.s.
	非該当	92.8		90.9		83.7		80.3		66.8	

n.s.: 非有意，*: $p<0.05$，**: $p<0.01$

6. 考　察

1）留意事項のカテゴリについて

先に述べたように、保育における鬼ごっこの実施には保育者による指導が望まれるが、具体的な遊びやその指導の内容に関わる留意カテゴリへの該当は少なかった。「指導・援助上の工夫」「教材選択・環境整備」「楽しさ・意欲への配慮」「集団に対する働きかけ」「個々に対する働きかけ」は、いずれも回答全体の半数に満たなかった。その一方で「安全への配慮や養護的事項」は多くの保育者に当然の事柄として留意されており、また留意がこの点だけに向けられているケースも2割ほど認められた。

穐丸ら（2007）の保育施設における伝承遊びの実施に関する調査[10]では、鬼ごっこを含む伝承遊びはほぼ全て（99.2%）の園で保育教材として取り入れられ、さらに72.7%の保育施設で保育者によって指導されていることが報告されている。また、教材選択の理由として、成長・発達に有用であること（84.2%）が筆頭であったことが報告されている。しかし、そ

のような明確な目的意識に基づく積極的な伝承遊びの指導の傾向は、ダイナミックな身体活動を伴う鬼ごっこに限定してみると異なっていると言える。運動遊びにおける安全確保は当然であるが、他の遊びと同じように内容や指導方法についても積極的に意識されることが望まれる。

2）鬼ごっこの実施状況との関係

①実施形態との関係

カテゴリ「身体活動としての配慮」「個々に対する働きかけ」の留意群において、自由遊びにおける鬼ごっこの実施種目数が多かった。特に「身体活動としての配慮」では、設定活動と合わせた合計の種目数でも同様の傾向であった。主要な回答内容としてもあげられたように、まさに「思い切り体を動かせるよう」「外遊びを多く経験する」といった身体活動を助長しようとする意識が、特に保育者の裁量で幼児と関わる度合いの高い自由遊びにおける鬼ごっこ実施に関係している可能性が考えられた。

また、鬼ごっこは集団的な遊びであり、継続のためには全員が一定のルールに従わなければならない。これが達成されないと崩壊してしまう遊びである。このような遊びにおいて、保育者の「個々に対する働きかけ」の意識は、能力的に個人差のある個々の幼児と鬼ごっこのルールとの間の隙間を埋める援助につながるものと考えられる。そして、このことが鬼ごっこ実施の下支えとなっている可能性が考えられる。

一方で設定活動においては、カテゴリ「楽しさ・意欲に対する配慮」の留意群のほうが鬼ごっこの実施種目数が少なかった。遊びの楽しさや幼児の意欲に配慮する保育者の意識が鬼ごっこの実施を活発にすると思われたが、逆の傾向であった。これについて考えられる理由として、鬼ごっこが幼児にとって楽しい遊び、あるいは意欲的・主体的に取り組むべき遊びとして保育者に認識されていないことが考えられる。先に示した穐丸ら（2007）の伝承遊び実施の全国調査では、保育に伝承遊びを取り入れる際の困難さの要因として、保育者の知識・理解の不足が最も多くあげられた。つまり、伝承的な遊びの存在や方法を知らない保育者が多かったのである。遊びの経験や知識がなければ、当然その遊びの楽しさは知り得ない。そのため、幼児にとっての楽しさや意欲に対して留意しようとするからこそ、保育者自身に実体験がないことが保育教材としての鬼ごっこの選択や指導に対する消極性につながっている可能性が考えられる。

②実施頻度との関係

先に鬼ごっこの実施状況について概説したとおり、半数以上の園で週に1回以上実施されていたのは、全体の実施率の上位3種目と同じ追いかけ鬼・氷鬼・ドロケイだけである。このように、広く日常的に行われている鬼ごっこ種目は限定されており、特定の同じ種目ばかりが繰り返されている状況が想像に難くない。保育者の意図的な指導なしに同じ鬼ごっ

こばかりを繰り返すことで、幼児はやがて物足りなさや退屈を感じ、やがては鬼ごっこで遊ばなくなることが懸念される。

調査結果として、留意カテゴリ「指導・援助上の工夫」の該当群において週に1回以上日常的に鬼ごっこを実施している割合が高かったことは、保育者の運動遊びの指導内容に対する意識と鬼ごっこの実施頻度との関係性を示唆していると考えられる。継続的に実施される遊びに対する保育者の指導や援助の工夫は、遊びに変化をもたらして幼児にとって新鮮なものにする。このことが、日常的な鬼ごっこ実施に寄与するという関係性が考えられる。

③実施種目との関係について

河崎ら（1979）は、ルールに基づく各役割の様態によって鬼ごっこを3段階に分類した[11]。この分類は、1人が1人を追いかければよいもの、1人が全員を捕まえようとするもの、集団対集団の意識を要するものという、ルールに基づく遊び手の目標水準の複雑さによるものである。今回の結果において、各留意カテゴリへの該当の有無によって差が認められた種目は、追いかけ鬼・ドロケイ・色鬼であり、河崎らの分類によればドロケイのみが最も目標水準の高い種目である。

ドロケイの実施率は、留意カテゴリ「指導・援助上の工夫」の該当群で高く、顕著な差が認められた。また、ドロケイでは「身体活動としての配慮」においても該当群の実施率が高かった。「安全への配慮」では、追いかけ鬼・色鬼では該当群の実施率が高い結果であったが、ドロケイでは有意な差ではないが該当群の実施率が低かった。

以上のことから、複雑な種目と単純な種目の実施率は、保育者の意識との関係性において若干異なる傾向が示されたと考えることができる。運動遊びに際しての保育者の意識が安全への配慮という水準にとどまらず、指導・援助を工夫しようとすることによって、より複雑な鬼ごっこの実施につながる可能性が考えられた。

3）総合的考察

遊びを指導するということは「自由な遊び 対 大人による指導」という対立的な構造を含み、特に1989年の幼稚園教育要領の改定以降にためらう傾向の出現が指摘されたことについて先に触れた。また、別の先行研究によって伝承的な遊びについては保育者の知識・理解の不足も示された。しかし本調査によって、保育において鬼ごっこがあまり積極的に指導されていない現状は、これらの傾向だけに起因するものではない可能性が示唆された。

鬼ごっこを含む運動遊びについての保育者の意識として、安全への配慮や養護的事項への留意は圧倒的であり、専らこの意識だけの保育者の存在も少なくなかった。鬼ごっこは集団的な遊びであり、スピーディでダイナミックな身体活動を伴う遊びである。この特徴は、幼児の成長・発達に大きく貢献する一方で、他の静的な遊びよりも事故やケガの発生といっ

た不安を保育者にもたらす。さらに、身体活動を助長する必要性を認めた回答は少なかったが、一方でこれを認めた群では鬼ごっこの実施種目が多い傾向であった。つまり、①危険に対する不安や心配、②保育における身体活動の重要性の認識不足という２つの新たな要因が示唆された。

もちろん、保育において最優先されるべきは生命の保持であり、あらゆる活動において安全への配慮がなされるべきである。しかし、これに次ぐ保育の重要な役割は幼児の成長・発達を助長することである。そのため、保育者が保育教材として価値の高い鬼ごっこを遠ざけることは大きな損失である。それでは、鬼ごっこが保育において積極的に実施、指導されるためにはどうしたらよいか。

まずは、鬼ごっこを安全に実施・指導するための方法が確立されることである。このように指導を行えば安全であるということが、保育者に具体的かつ明確に示される必要があると思われる。また、指導の方法は安全にとどまらず、遊びである以上はそのおもしろさを助長するための方法についても示されることが望まれる。このように、保育者の心配や不安を減らし、運動遊びの指導の内容や方法に留意する意識の形成によって、保育における積極的な鬼ごっこの指導・実施につながるものと考えられる。

謝　辞

本研究にあたり、調査にご協力いただいた幼稚園・保育所の方々に御礼申し上げます。

引用・参考文献

1）渡邊 明宏（2006）．鬼ごっこの運動強度と動作特性について．教育医学．52（1）．79 － 80.

2）C. Kamii, R. DeVries（1980）．保育所・幼稚園 集団あそび －集団ゲームの実践と理論－（成田 錠一訳，1984）．北大路書房．2 － 15.

3）河崎 道夫（1994）．あそびのひみつ －指導と理論の新展開－．ひとなる書房．12 － 16.

4）勅使 千鶴（1999）．子どもの発達とあそびの指導．ひとなる書房．90 － 93.

5）小川 博久（2010）．遊び保育論．萌文書林．48 － 50.

6）渡邊 明宏（2013）．保育と鬼ごっこ．子どもと発育発達．11（1）．51 － 53.

7）渡邊 明宏，穐丸 武臣，野中 壽子（2010）．保育施設における「鬼ごっこ」の実施状況．日本発育発達学会 第８回大会抄録集．86.

8）山田 敏（1999）．遊びを基盤にした保育．明治図書．170 － 178.

9）前掲（4）．106 － 217.

10）穐丸 武臣，丹羽 孝，勅使 千鶴（2007）．日本における伝承遊び実施状況と保育者の認識．人間文化研究．7．57 － 78.

11）河崎 道夫，前田 明，張間 良子，村野井 均（1979）．幼児におけるルール遊びの発達 －その１仮説構成の試み－．心理科学．2（1）．39 － 46.